



「日本語学校の教職員が選ぶ留学生に勧めたい進学先」

平成 24 年度日振協日本語学校教育研究大会実行委員会主催

進学先アンケート調査チーム報告

2012 年 10 月 1 日

1 経緯および趣旨：

財団法人日本語教育振興協会（以下、日振協）が毎年夏に開催する「日本語学校教育研究大会」の今年度（8月10日・11日開催）のテーマは、「日本語学校の今日的役割りと専門性Ⅲ～日本語学校から見た世界」であった。過去2回（平成22年度・23年度）は、日本社会の中の私たち日本語学校の役割り、という視点で様々な議論を交わしたが、今大会では、留学生受入れの最前線にいる私たちを視点の中心に置き、日本語学校から見た日本社会や受入れ問題を明らかにしようと試みた。

内容の企画に当たり、昨年（平成23年度）の10月に開かれた日振協会員校の校長、主任を対象とした日本語学校教育セミナー（通称：京都セミナー）の全体会議で出された提案～日本語学校側から進学先への発信の必要性とその具体的方法としての進学先評価～が、実行委員会会議で取り上げられた。検討の結果、今大会のテーマと趣旨が合致するとして早速具体化することになり、今回の調査～発表の実現に繋がった。

このアンケート調査、および賞の設置を図ることにより、私たち日本語学校が外国人留学生に勧めたい大学・専門学校像を明らかにし共有すること、そしてまた、好評を得た学校を表彰することにより、今後ますますよい連携に向けてのつながりを深めることも目指すものである。学校評価の観点は様々考えられるが、現場の実態を反映させるために敢えて絞り込まず、どのような観点・理由であっても「勧めたい」という一点において、日頃どのように認識し学生対応に生かしているか各校の現場教職員の意識を探った。

2 実施方法：

ウェブアンケート回答形式による投票。各校が5票を上限として「学生に勧めたいかどうか」という視点において投票。責任を持った投票を促すために、学校名と投票者を明らかにし、投票理由も明記することを条件に入れた。

送付日本語学校数：451校（2255票）

回答校数：132校（237票）

回答率：29%（票数では10%）

3 授賞校：

大学（理工系）部門賞受賞校★および上位入賞校

東京電機大学★

東京工業大学

東京都市大学

足利工業大学

大学（文科系）部門賞受賞校★および上位入賞校

明治大学★

愛知大学

早稲田大学

聖学院大学

専門学校部門賞受賞校★および上位入賞校

日本電子専門学校★

文化服装学院

日本工学院専門学校

ヒコみづのジュエリーカレッジ

ホスピタリティツーリズム専門学校

4 結果考察：

◆全体について

結果を概観すると、投票率の高いのが専門学校（４０４票）、つぎに大学文科系（１９９票）、そして大学理工系（１４６票）となっている。専門学校の場合、カテゴリーと校数に考慮して１～３まで枠を作ったこともあるが、第一カテゴリーだけ見ても２１３票入っているところを見ると、日本語学校にとっては身近な存在であることが見て取れる。

逆に、大学の理工系は票数が最も少なく、現場からも選考が難しいという感想が聞かれた。理工系に進む学生の割合も文科系に比べると少なめであることに加え、専門領域などで自ずと絞り込まれるケースも多く、学校としてアドバイスする機会是比较的低い傾向にあるためかもしれない。

進学先評価という初めての試みに、どの日本語学校もかなりの戸惑いを覚えつつ、「学生に勧めたい」という視点を、それぞれ自分なりに解釈し投票したものである。しかし、いざ評価となると、特にポジティブ評価は、何に対して、どのような点で見た場合に良いのか、真面目に突き詰めるほど答えを出すのは難しく、ネガティブ評価は具体的なエピソードや体験が浮かびやすい点でずっと簡単だと言える。実際に「勧めないところならすぐ出せるのだが、

推薦したいという視点で1校を選ぶのは非常に難しい」という声もいくつかの学校の担当者から寄せられている。

しかし、結果はなるほど、と納得できる学校、理由となった。特に専門学校は、名前が出るべくして出ているという感がある。一方の大学についても、有名校だけでなく比較的小規模だが留学生に対してきめ細かく対応してきた学校に票が集まった点も、日本語学校ならではの結果と言えよう。

残念ながら、入賞した多くの学校が首都圏であったことは、投票した日本語学校の約6割が首都圏だったのに対し、その他の地域が分散してしまったのは明らかで、今後はさらに多くの学校が投票に協力してくれることを期待したい。

◆受賞校の授賞理由について

上位校は、単に有名校だからという理由ではなく、留学生受入れに関して熱心であり、募集要件が明確で学校の受入れポリシーが感じられること。留学生枠を設けてきちんと対応している学校に支持が集まった。

また、入学後のサポートについて、教職員が親身に対応し、在学中や卒業進路などの状況や結果を伝えてくれるなど日頃のコミュニケーションの有無も、日本語学校にとっては重要な評価ポイントになっていた。要望にもそうした入学後の情報を求める声は多く寄せられている。

教育内容の点では、様々な学生のニーズに対応できるだけの幅広い内容、バリエーションを備えた規模が支持される一方、それほど大規模でなくレベルもそこそこだが地元で学生が進学しやすい地元の学校にも票が集まった。高等教育機関としての教育の質の高さ、指導の厳しさを求める一方、留学生を単に穴埋めの代替として扱うのではなく、留学生を受け入れるための教育ビジョンがあり、受入れ態勢がそれに伴っていることを日本語学校が求めていることがわかる。

●募集活動

担当者がよく来訪してくれる、出願時からのナビゲーションが優れている（安心して受験に臨める）、AO入試がある、留学生受入れに積極的、など

●募集要件／入試（基準）

きちんと選別している（ポリシーがある）、基準が明確（わかりやすい）、学費が安い／奨学金や減免措置がある、など

●入学後のサポート

在学中のサポートがきめ細やか、中国（出身地）への理解が深い、英語で授業がある

就職支援がしっかりしている、就職実績がある、入学後の学生の様子を伝えてくれる、など

● 教育の質

専門性/教育力の高さ、厳しさ、学校の理念/教育方針が明確、学生の評価が高い、教育レベルが高く信頼できる、学域／バリエーションが豊富、 外国語学習に力を入れている、留学生に対応している、など

● 学習環境、評判等

設備／校舎がよい、学習環境がいい（研究／学習に集中できる）、知名度が高い、学生に人気、立地条件がよい、地元である、など

◆要望まとめ

要望は81件寄せられた。大まかに分類すると、約半数が募集選考に関するもの（39件）、入学の手続（9件）、入学後のサポート（16件）、学校とのコミュニケーション（16件）、その他（1件）となった。募集選考に関する要望のうちの3割が学生や日本語学校への事前の学校説明や情報提供、公開などで、より開かれた説明会や情報提供、学校アピールなどを求める声が多く、学生に的確な情報をわかりやすく伝えたいが情報不足であると感じていることが分かる。

最も多い募集選考については、選考基準の明確化、入学試験・過去問の公開、募集人数の明示（若干名ではわからない）、募集要項を詳しくわかりやすく、日本語力や出席率等日本語学校時代の実績重視などを求める声が寄せられた。ことに、日本語力が低い学生も合格させてしまうケースや、日本語学校の書類を求めず合格を出すなどのケースに、留学生受入れポリシーに担当者が疑念を抱く原因となっている。

合格後の手続についての要望も10件近く寄せられた。特に授業料納入と、保証人の問題についての要望が目立った。授業料納入に関しては、複数校合格した場合に不入学となった学費の返還、学費分納について、学生の側に立った柔軟な対応が求められている。また、手続の段階で日本人の保証人を求める学校への苦情も多く寄せられた。合格後、保証人がいないために入学を断念した例も報告されている。他に、重要事項は母国語で情報提供を求める声や、書類準備が過剰だと訴える声もあった。

入学後のサポートにも経済援助を求める声は多い。多くの日本語学校が、奨学金制度や学生寮などの充実や就職までの一貫したサポートを望んでいる。また、入学後の学校とのコミュニケーションも多く为学校が求めており、進学後の在籍状況や卒業後の進路状況など、知らせてほしいという回答が多かった。

その他、専門学校に対してわざわざ日本にまで来て勉強する価値を提供できているのか良く検討してもらいたい。大学進学予備校化している専門学校があるが、本来の専門学校の範疇ではない、慎んでももらいたい。と、苦言を呈した意見も寄せられた。

5 謝辞

今回は、初めての試みとは言え、事前の十分な説明がなく戸惑われて当然の状況にも関わらず、授賞を喜んでお受け下さった大学・専門学校の皆様、そして日本語学校の現場の教職員各位に、日本語学校教育大会実行委員一同、心よりお礼申し上げます。

また、実行委員会の提案を承諾してくださった日本語教育振興協会の佐藤次郎理事長、実施の事務的な連絡、処理を一手に引き受けてくださった同協会の小野寺陽子さんにも感謝を申し述べます。

これを機会に、日本語学校と高等教育機関とのコミュニケーションが進み、日本留学の振興につながることを目指し、今後よい賞に育てていく所存です。

どうぞよろしくお願い致します。